HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	音声で表現される意志とその交換に関する考察
Author(s)	田荷, 繁
Citation	北海道大學教育學部紀要, 18, 49-52
Issue Date	1971-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29056
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_P49-52.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

音声で表現される意志とその交換に関する考察

Consideration of volition and Its Exchange, Expressed in Speech

田　荷　　繁
Shigeru Tani

論　文　概　要

これは音声言語による意志の表現作用に関する論文である。意志を概念によって規定されるものと考えると，意志には認知要素以外に感情と欲求とがかかわってくる。そこで，それらを包含して表現するための音声言語に２種類の区別を行って説明を加えた。単音節と複音節と意志との関係，有意味な言葉と意志との関係をとり上げ，更に音韻と意志との関係についても記した。発声問題と受聴問題にふれ，話したい聞きたいという原初的意志を発声意志・受聴意志として零次性とし，音韻・単音節を感覚的表現として２次性，有意味な言葉によるものを叙述的表現として１次性とし，意志の定義的類別を行なった。ついで，意志の伝達が生ずる理由を考察した。

§1　まえがき

本論文において，音声言語で意志を表現することについて従来看過されがちと思われる問題点を指摘したい。そして「意志と音声」と「意志の交換」の二分節に分けて記す。本来，意志は表現されることが望まれるものであって，その意味で欲求がかかわってくることを中心にして考えた。

§2　意志と音声

意志は感情的にまた意味的に行動と結合しているものであるが，意志がすべての行動において直接に意識されている訳ではない。常日頃，我々は格段の努力もなしに意志を表現しているのである。声を出すこと自体，自己の欲求とつながっている。

ヴィナックは概念について次のように言っている。「概念とは，現在の刺戟対象に，過去の経験の中でそれに該当する諸特徴をまとめ結びつけるように組織する体系である。刺戟が人に対してある効果をもつ（その人がそれを知覚する）と仮定すれば，その対象が解釈され，意味づけられ，その生活体の中にそれと同時に起っている他の諸活動と結びついた諸過程が呼び起されているのである。これらの過程はでたらめに起っているのではなくて，ある程度組織的に一貫して起っている。いわば対象についての以前の経験があれば，同じようにして同じような種類の対象に対して人は反応する。概念の特性を定義するということは，われわれの経験がいかに体制化されているかを確認していることである。概念には通常，言語的符牒（たとえば刺戟物の名称）がつけられているが，概念それ自体は実際はその対象と結びついている印象，感情，反応を代表する内的活動の複雑な体系である。」以上の表現には私は賛同するのであり，そういう見解をもって本論文を展開する。

「天に太陽，地に人あり」という文章は天体のことを言っているし自然のことも言っている。生活している我々の社会についても暗示的である。太陽の恵みについても言っている。「太陽があるからこそ我々は生きている」と言っているのだと解釈しよう。これは，これらの表現

に用いられた言語的概念の背景に，語り手の持っている複雑な体系としての概念（前概念）があることを前提として可能となる。しからば，ヒトは如何にして自らの意志を他者に伝達するのであろうか。

ヒトの恐れと怒りの表現においては，ピッチの高さが低くまた高くなっており，音声言語という学習されたもので意志を表現するということが言える。まとまって印刷されたものを，日本語では「本」，英語では「book」，独語では「buch」，フランス語では「livre」，ヒンズー語では「kitab」と呼ばれるが，これらの音声記号のどれをとって見ても言い表わそうとしている当の対象を連想させるものはない。

長い言語表現を分解して見ると，単音節とか複音節で意志が表現されていることがある。つまりその中に感情と欲求との存在が見られ，こうして意志の本質が伝えられるのである。「そうお」という言葉は，三種類の単音節からなる複音節である。高さのアクセントは最後の「お」で下降する。「う」または長音記号を含めて始めは強いテンションをもっている。「そうであるか」の意志を表現することは，とりもなおさず高いピッチ・テンションに置かれているのである。

「うん」は納得の返答であるが，「うーん」とすれば「わかったってば」「わかっているんだが」のようになる意味をもつ。延伸のところに力点がある。これらは了解の意味に感情をおりまぜたものである。また，これは日本語独特の表現であって，ピッチ・アクセント以外に，力点によるアクセントもあるのだということを理解しなければならない。これらは共に意志の言語的表現の代行をするものである。

また「そーお」と言ったきりで口をつぐむという行為で何かの意志を表現することもあるであろう。単音節の中にもこのように，長音や抑揚によって語り手の感情や欲求が含まれるのである。

このような例を謡曲に見ることができる。能の声学的要素が謡曲であって，うたわれる部分と節をつけない〈ことば〉と称する部分とがある。これらは細かく入り組んで謡曲と称される。フシにはヨワ吟とツヨ吟の2種の部分がある。両者では音階が相違し，ナビキ（声を細かく上下させること）のつけ方や，スリ上げ（音をなめらかにすべらし上げること）の有無の違いがある。拍子不合（ひょうしあわず）の部分と，拍子に合う部分とに分けられる。

いわゆる話し上手といわれる話し手は，単音節による話の要素的部分に，広い意味での概念，つまりは話し手の意志を含ませるために，抑揚，スピードなどを調節することができる。これらのことは聞き手の注意をひきつける実際的効果をもっている。

従来，心理学では注意と言語認知の精度，あるいは masking の過程について分析がなされているが，ここではこれらの問題として指摘するにとどめたい。

言語表現には単音節を中心とした情動要素の表現の他に，言葉の意味内容による1次性の叙述的意志表現を考えることができる。くり返して言うと，単音節に意志の情動的欲求的部分があることから始って，言葉に構成され，ここで切りかわり意味内容に意志がでるという形式が言語表現の基本形態である。言葉の中の単音節が，どのようなテンションで意志を分担するかということを考えることができる。時間的局面からとピッチの高さと長音などの強めの程度からの分析は，従来の研究ではあまり重視されていないが，これは本来もっと積極的に追求されなければならないのではないか。

日本語の単音節はＣＶ形，即ち子音プラス母音の形でできている。時間的に単音節に延伸があると，それは母音が役割を荷なう訳である。これには例外があって，「フーッ」と吹くときの気音では子音の延伸と考えられる。母音は全て有声音であって，声帯の振動によるものである。調音器官，即ち舌の形と位置によって発声母音は区別されてくる。この場合には，唇，顎，声帯，舌，および肺に運動指令が出ている訳である。

ここでは以上の考察にもとずいて，話し手の意志の表現をつぎの3段階に区分しておくことにする。

2次性＝感覚的表現
1次性＝叙述的表現
0次性＝発声受聴意志

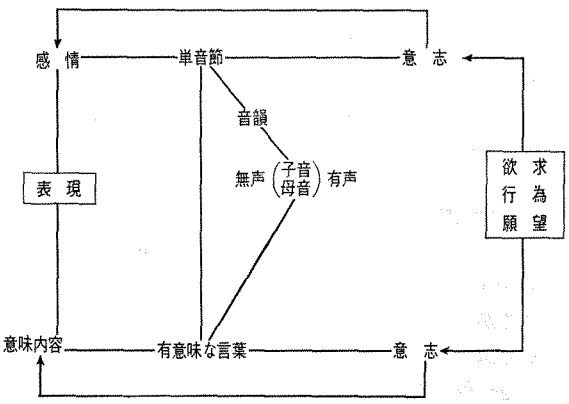

図 2・1 音声と意志との関係図

以上述べたことを綜合して図2・1に音声と意志との関係を示す。

§3 意志の交換

何故，ヒトは他者に語りかけようとするのか。犬好きが犬に語りかけ，母親が嬰児に語りかけるのは何故か。また何故語りかけられた者はそれを聴こうとするのか。語りかけに応答しようとするのか。これらの問いには十分な解答があろうとも思われないが，解答えの若干の示唆をするにとは出来よう。

(1) 聴覚器官と中枢を含めた聴機能が正常であること。モニター可能性は発話の正確さの保持という実用的効果のほかに，自己の発話そのものが一種の快の状態を生みだす刺戟源となる。環境の変化がある限度内では生体を快の状態にすることを示す若干の知見がある。動機づけに関する古典的理論，即ちハルの行動理論中には，有機体の内部または外部からの動因刺戟が，その動因を除くようになんらかの手段が見つかる迄，有機体を行動へと駆りたてる。そこで報酬とは，動因を低減させることとそれに伴う刺戟とから成り立っている。フロイトの精神分析理論によれば，脳の機能はあらゆる型の刺戟作用を低減させるか，またはそれを除去する筈であるという。しかし，人々が求めているのは幾らかの変化を伴った適当なレベルの刺戟作用であって，刺戟の欠除あるいは過剰ではない。環境的な刺戟作用を求める人間の強烈な欲求は，マッギル大学でおこなわれている感覚遮断の研究で例証され，余りにも有名である。大学生が一日20ドルの支払を受けて，小さな部屋の快適なベッドに横になり，散乱光しか通さない不透明なゴッグルを目前につけ，手は厚紙の筒でおおわれ，物音はエア・コンの雑音とフォームラバー製の耳覆いで遮断された。食事をするときと，トイレットに行く場合とテストを受ける場合のわずかな時間を除いて，彼らはただ何もしないで過ごした。しかしながら，かの幾つかの理論に反して学生たちはこの昏睡の状態が耐えがたいことを悟った。彼らはひどく刺戟を求めるあまり，古い株式市場の録音をくり返し聞かせてくれと頼んだ。できるだけ長くとどまるように言われたのに，大学生はわずか2日か3日しかその状態では過ごせなかったといわれる。最初，彼らは個人的な問題や知的な問題について考えようとしたが，思考の流れに心を集中するようになり，そしてそれを保持できなくなった。混乱し，いらいらし，ストレスを感じたのである。最後に視覚的な幻覚を感じ，光の点が現われ次いで幾何学的模様が現われ，ついに生き生きとした光景が現われた。この実験の意味するものは多様であろうが，その一つは正常な心的状態を持続するためには刺戟の手がかりが極めて重要な要因となっているということと，刺戟を求める欲求というものが如何に根強くあるものかということを示したことにある。音楽などは適度の強さでなければとても聴けるものではない。

(2) 相手が応答への志向をもつであろうという期待。石に語りかける高僧，犬に語りかける犬好き，および日常散見する会話では，およそ会話の成立するところには，相手が自己と同じ心理学的場の中にいることを暗々裡に前提としている。その中で特に重要なのは，情動的な場である。「大きい犬に出合った」とたという表現は，「体長1 m 50 cm の犬がいた」と言う叙述とは異って，大きい犬に出合った語り手の情動体験を含んでいる。そして聞き手の中で「大きい」と「出合った」という有意味語によって場を意識させる。情動的要素が理解されることをも前提としている。

このようなことから考えると，意志の成立基盤は，まず原初的には感覚刺戟による快を出発点とする。ついで情動体験を何かの程度に表示する言語表現によって相手に伝達し，そのことで聞き手の中に応答の志向を発生せしめるところにあるということになる。

§4 あとがき

本論文は，意志とはどういうものであるか，特にその作用に関して，音声を媒介として解明する目的をもって書いたものである。まず意志概念について考え，感情と欲求とにかかわる意志の起伏について述べた。次に意志に関して単音節と複音節，音韻，そして言葉の表出するところのユニークさについて述べた。

最後に意志と感覚的情動との関係について述べた。

ここに述べたことは，言語による意志の表現過程の十分な理解に達するための2，3の問題点に過ぎない。しかし，ここに触れた問題は，言語表現の工学的処理では従来ほとんど無視されて来たものであり，しかも意志の十分な伝達の必須要件となりうるものである。

引用文献

(1) 服部四郎：音声学，岩波書店，1963
(2) Paul H. Mussen：児童心理学，今田恵訳 岩波書店，1969 (1963)，P 42
(3) Edward J. Murray：動機と情緒，八木訳 岩波書店，1969 (1964)，P 107
(4) 波多野完治編：精神発達の心理学，大月書店，1967
(5) JAGIT SINGH：Great Ideas in Information Theory, Language and Cybernetics, DOVER

PUBLICATION Inc, 1966. 情報，言語，サイバネティックス，はやしはじめ，梅田宗広訳，白揚社，1970.

(6) J. Z. YOUNG : Doubt and Certainty in the Science, Oxford at the Clarendon Press, 1951. 人間はどこまで機械か，岡本彰祐訳，1956.

(7) Vinacke, W. E. : Concept formation in children of school ages. Educ., 1954, 74, 527-534, P 529